
竜と食べ歩き。

コトオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と食べ歩き。

【Nコード】

N2962Z

【作者名】

コトオト

【あらすじ】

魔王復活が近いとされ、世界は聖剣を抜く勇者を求めている。けれどそんなの知ったこっちゃない。新米冒険者アルフィリアは世界の危機を横目に、美味しいものを求めて食べ歩きの旅をする。旅のお供にワケ有り剣士と、ワケ有りペットを引き連れて。 のんびりペースで気ままに書いていこうと思います。

炭火烧ハンバーグ

数千年の時を経て、封印されし魔王が、復活するという。

王宮の占い師がそう告げる。

勇者を呼べ。勇者を召喚^よべ。手遅れになる前に。魔王が復活する前に。

神殿に眠る？聖剣？を抜いて見せよ。魔王の封印をするために。

神の御使いを世界から探し出し、従え、祈りを、加護を受けよ。

魔王の封印をするために。

お触れは瞬く間に世界を駆け巡る。

我こそはという若者が、こぞつて？聖剣？の眠る聖王都へやってきた。

勇者になり、英雄になる者に褒美を遣わさん。願いを叶える。世界を救え。世界を救え。

英雄譚に憧れ、金に酔い、地位を求め、様々な者が？聖剣？に手をかけた。

しかしながら？聖剣？は抜けるどころか、その姿に触れることすら、許さないという。

確かに、近年魔物の動きは活発化している。
人を襲う魔物も多く、狂暴化しているようだ。
世界をめぐる商人は言う。早く平和になつてくれないモノかね、
と。安心して旅もできやしない。

「…… だからそんな時期だからね、お嬢ちゃん。悪いことは言
わない。冒険者なんて止めときな」

「ご心配ありがとうございます、主人。だけれど私は大丈夫ですよ」

にこりと微笑んで、手元の記入済みの書類を渡す細い少女を、冒
険者ギルドの亭主は胡散臭い目で見つめた。

「アンタみたいなほそっこいおなごが一人で冒険者なんかになるな
んぞ、自殺行為もいとこだと思うがね。はつきり言つて無理だろ
う」

「良く言われます。しかしながら旅を安全かつ円滑に行うのに、冒
険者カードは便利です」

明らかに卑下した言い方をされたはずなのに、少女は淡々と返し
た。口元の笑みは崩さずに。

「身分証も持たずに山賊扱いされるよりかは、ランクが低いと馬鹿
にされようとしつかりとした証明書を持っていた方がいいでしょう」
「証明書扱いのためだけに申請を上げるのかい？」

「もちろん仕事はこなしますとも。職業ですから」

胡桃色の長い髪をひとつ、三つ編みにして背中にたらす。長い前
髪から覗く瞳は新緑のような明るい緑色だ。隠すように、茶色のフ
レームでできたメガネをかけている。

細い体格だが、一般的な女性よりややスレンダーなだけで、体格

はそこまで貧相というものではない。被るマントはやや汚れているし、頑丈な手袋や固いブーツは旅慣れたほころびを見せている。荷物も多くななく、持ち運びやすい形状の鞆だ。旅をしてきたのだと一目でわかる。

ただ、屈強な男性の多い冒険者を見慣れてきたギルド主人だからこそ、より華奢に見えるだけだ。

「毎年いるのさ、そういつた冒険に憧れた若者が。すぐに現実を見ることになる。お前さんのできる仕事はせいぜい宅配だ。大手柄の物は無理だろうさ」

「美味しいものが食べられるだけのお金があればそれでいいんですよ。そしてマスター。冒険者カードの受け付けはこれで終了でしょうか？ どれくらいでできますか？」

マスターの言葉にも反応せず流し、少女は首を傾げた。その問いに、マスターはやる気なさそうに書類に目を落とす。

アルフィリア・ハーゼル。十九歳。女。その他必要事項の書かれた契約書に不備がないことを見つめて、ひとつ、あきらめたような息を吐いた。

「明日の昼にはできあがる。それまで護衛の傭兵でも探してきたらいい」

「ああ、それは良さそうですね。それではマスター、あとをお願いします」

「来月もアンタの無事な顔を見られることを祈ってしよう。ここは荒くれ者の来る場所だ。あまり遅い時間には近寄らないように」

皮肉を言いながらも最後には心配の言葉を述べるギルドマスターは、顔に大きな傷ともじやもじや髭の生えた顔つきで威圧感もかな

りあるが、実は人の良い性格をしているらしい。

アルフィはにこりと笑いお礼を言う。踵を返そうとしたところで、マスターに話しかけられた。

「アンタは？勇者選定の儀？に行かないのかい？ 女も子供も関係ないらしいからな」

「いいえ、行きませんよ。私がこの町に来たのは違う目的ですから。興味をひかれたらしい。カウンター越しに腕をつき、「そりやあなんだ」と片眉を上げて問いかけられた言葉に、アルフィは得意そうな顔で答える。

「そりやあもつ、美味しいもの食べに来たに決まってるでしょう」

先ほど本屋で手に入れた『世界美味しいもの漫遊記』と書かれたガイドブックを広げる。地図を広げて聖王都の町を思い浮かべた。

王都の中心部、天使をかたどった銅像が並ぶ公園。その中心にある大きな噴水の階段に腰かけて、アルフィリアはこれからの予定を組み立てる。

「カードは明日出来るそうだから、それまでゆっくり観光でき

そつだ。宿も取つてあるし。ふむ、それでは早速あそこに行つてみようか」

冒険者ギルドで話していた口調とは違い、ざつくばらんに話す言葉はやや特徴的。顎に手を当ててふむふむと考え込む姿に、上品な仕草などはない。

そうして行く先の目星をつけ、ガイドブックを置むと、アルフィは前を見据えた。

冒険者の格好をした様々な若者が城へ向かっている。意気揚々とした顔の者、意気消沈した顔の者。

アルフィが座る噴水の周りにも、買い物中のおばさんや物を運ぶおじさんや遊びまわる子供たちと共に、噴水に腰かけて町の風景を見る若者が多い。それは、街の住人らしき姿もあれば、明らかな異邦人の姿が圧倒的に多かった。

旅人が訪れる目的の大半は、正面にかすんで見える王城へ行くこと。

そして、勇者である資格を試すためだ。

「……世界を救う勇者、ねえ」

ぼんやりと周囲を見渡して、ぽつりとアルフィは呟く。アルフィの周りは少し空いている。多少不謹慎なことを言つても、誰も聞いていないだろう。

「……くだらない」

……おや？

重なる声に眉を寄せて視界を彷徨わす。

すると同じような疑問を感じたのか、きよるきよると首を回していたフードの者と目が合った。

炭火焼ハンバーグ（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます！

思いつくままに書いているので、設定などは割と適当だったりします……。

炭火烧ハンバーグ 2

アルフィリアが座る場所よりひと一人分の間を開けて、その人は座っている。

灰色のフード付きマントを羽織り、脇に一人分の大きな荷物を抱えている。そして足元に何やら四角いケースがひとつ。取っ手付きのそれは、一抱えできるほど大きい。武器の類だろうか、アルフィは考える。

フードの下から見える瞳は青色だった。きよとんとこちらを見る顔は、年若い男性である。すっきりとした鼻筋の、なかなか整った容姿をしていた。

「……あなたも？」

ぱちぱちと目を瞬きさせた青年は、そう問うてわずか苦笑した。意味を測り兼ねるアルフィに補足するように続ける。

「勇者、のことを？」

「……ああ」

納得をし、アルフィは気まずそうに視線を逸らした。

「お恥ずかしい。あまり聞かれない独り言だ、忘れてくれ」

「いえ、わた……俺も、そう思っていたから」

敬語を使いかけ、アルフィの言動に合わせることにしたらしい。青年はそう答え、それから「よいしょ」と声をかけ、足元の荷物を抱えてアルフィの方へ距離を詰めた。

「良ければ聞かせてくれないか？ あなたがそんなふうにする理由を」

「……よしてくれ。不敬罪で牢獄に入れられてしまう」

「この国では、勇者のことを悪く言う就是不敬罪になるのか？」

アルフィは首を傾げて青年を見る。青年は、少し困ったように微笑んだ。

「すまない。あまりこの国の常識を知らないんだ。なにせここは着いたばかりで」

「……ずいぶんと田舎から出てきたのだな。勇者のことを考えれば、けなす言動はあまり褒められたものではない」

「……それは、世界を救う勇者だから？」

きよとん、とする青年を少し胡散臭げに見返す。何を言っているのだ、という目だ。

しかしながら、わずかばかり気が乗ったこともあり、アルフィはしばしこの青年に付き合うことにした。

「王様からのお触れでもある。王様が国を挙げて勇者様を見つけようとしているのだ。不敬罪ととられても致し方あるまい」

「……確かにそうだね。王様がお触れを出している。なにより世界を救ってくれる勇者様だ。その方を悪く言うなんて」

「そうだ。だからこの発言は褒められたものではない」

「けれどあなたは呟いた」

くす、と笑う青年の顔に言葉を詰まらせる。話が最初に戻ってしまったと、アルフィはひとつ息を吐いた。誤魔化そうと思ったが、そう見逃してくれないらしい。

「……変なことを聞いてもいいかい？」

ふと青年がそう漏らす言葉に、首を傾げて答える。

「なんだ」

「国は、どうして勇者を選定しようとしているの？」

アルフィは青年を見る。青年は少しばかりばつの悪そうな顔をした。自分の質問が、いかに常識知らずであるかを恥じるような顔だ。

なるほど、世間知らずな質問であることも自覚しているらしい。

「勇者と魔王のおとぎ話を、聞いたことは？」

「……」

気まずそうに視線を逸らす青年に、アルフィは目を細めた。

勇者の伝説は有名なおとぎ話で、小さいころ誰でも一度は読んだものだし、それに今回の勇者選定のお触れは大陸全土に知れ渡っている。知らないとするれば、相当な世間知らずだろう。

しかしながら、自分の出自もあまり褒められたものではない。そういう者もいるのだろうと結論付ける。

見知らぬ青年だが、旅人たるものどこにいても誰とでも仲良くできる社交スキルは必要だし……なにより、青年の表情が、嘘をついていないことを物語っていたからだ。

「昔、世界はひとりの愛の女神によって創られたとされている」

けなすわけでもなく、淡々と話し始めるアルフィに、少しばかり驚いたような顔を青年はして……嬉しそうに笑う。

その顔にまんざらでもない気持ちを抱きつつ、アルフィは続ける。

「女神はすべからく人々に愛を分け与えた。人々は互いを慈しみあい、平和な世界だったんだそうだ。しかしそこに、女神の愛を独り占めしようとする者が出た。

そいつは、女神を愛するあまり、女神を殺した。そして、その愛を自らひとりのものにした。

やがて魔王と呼ばれた。この世の邪悪を集めた、恐ろしいものだったそうだ。

魔王が君臨した世界から愛が消えた。それは人々を互いに罵り合わせ、蔑ませ、戦争の時代になった」

やや支離滅裂だが、おとぎ話だ。それにアルフィもそこまで真面目に覚えているわけではない。

だが、青年は真剣に聞いている。アルフィはそれを茶化すことなく、続ける。

「殺された女神は、最後の力を振り絞ってその力をいくつか残した。そのひとつが聖剣。邪悪なるものを振り払う聖なる剣。

ひとつの光は神の御使いと呼ばれる使者となった。そして荒廃した世界にもうひとつ光が生まれた。

女神の願いを受け止めた無垢なる魂。それが勇者」

御使いは、勇者を見つけ、自らを空を駆け巡るための姿となり、勇者を乗せて魔王の元へ運んだ。聖剣は勇者を護り、加護を与え、悪しきものを打ち払った。

勇者は、その女神より受け継いだ力で、魔王を倒す。

魔王が持っていた女神の愛を分け与えた。そうして世界はまた、愛の力で争いが収まった。

しかし聖剣は、魔王を完全に打ち破ることはできなかった。

人々が互いを憎しみ合う心は、人々から消えることはなかった。

だが勇者も疲弊していた。女神の力を持つ二人の力は拮抗していたのだ。勇者の命も尽きようとしていた。

そのため勇者は、残る力の全てをかけて魔王を封印した。そして聖剣を二つに分け、ひとつは魔王の封印を、ひとつは残る人々に導くとして与えた。

封印は完全ではない。またいつか復活するだろう。

そのとき、この聖剣を持って、魔王を滅ぼせ。そして同じように

封印をするのだ。

そのための先見の加護を与えよう。

そのための導を御使いに託そう。

そのため、我はまた生まれ変わろう。

魔王が復活するとき、我はまたここに来よう。

「聖剣は先見の力を受け継いだ一族が管理し、一族は王となり人々を導いた。それが今代まで続いている。王族はかつての勇者の子孫でもある」

「……なるほど。勇者を見つけ出すのは先見の力を持つ一族だけ、というわけか」

「力の強い者は王族であると同時に占い師でもある。今代で一番力の強いのはこの国の第一皇女であり、女神に仕える巫女姫という立場にもある、名をエルステリア様。その巫女様が夢見を予言すると同時に、次々と王族の間で魔王の復活を夢見たという」

現に世界各地の魔物の行動も活発化しているらしいしね、とアルフィは言う。

「だから、必死なのさ。魔王を復活させまいと、この時代に生まれただけの勇者を見つけようと」

「……………でも、聖剣はまだ抜けないんだね」

「その通り。いまだ勇者は現れない」

しかしながら、国がそのように動いていても下々の者たちにはいまちピンと来ないのが現状だ。実際にアルフィの目の前にある光景は、勇者選定の儀で訪れる冒険者たちに商売をふっかける、たくましい街の人々の姿である。

「魔王復活が近いとはいえ……目立った被害など出ていないのが現状だ。ゆえに、現実味がない。この話も人々にとってはお祭り騒ぎみたいなものだよ」

「なるほど。世界の命運をかける争いが控えているかもしれないというのに、みんな顔が明るいと思ったのは、そういうことだったのか」

青年が大げさに肩をすくめる。アルフィの言うことを理解したのだろう。アルフィは同意するように続けた。

「そうとも。呑気なものだよ。世界の行く故を考えるのではなく、目先の生活が平和であればいいと、民はそう思っているのだから」

……だからこそ、

「……あるかも知れない曖昧な伝承を信じて右往左往する国と、現実味のある下々の民との違いに、呆れていると？」

アルフィの呟いた言葉の真意をつかみ、青年は見透かすようにそう告げた。

アルフィは苦笑を滲ませて首を振る。

「………どうか内密にしてくれ。王城に勤める関係者に知られたら、打ち首にされてしまう」

「心配いらないよ。俺は身分証すらもたない、ただの風来坊だから笑みを浮かべてそう言われ、アルフィは改めて目の前の青年を見る。その言葉が真実かどうか判断しかねるが、少なくとも今すぐ兵士の詰所に連行する気はないらしい。」

「………しかしながらその言い方だと、あなたの言葉はまた違う意味を持っていると思われる」

不謹慎な発言をしたのは自分だけではないと、アルフィは告げる。この青年もまた、目の前の現状を「くだらない」と言ったのだ。

青年は苦笑を浮かべる。まいったな、という顔だ。

「俺は……勇者というものについてそう言った」

「勇者について？」

「だって、」

言葉を区切り、青年は正面に向き直った。活気のある人々を見て、目を細める。

「……世界の命運をかけるものだというのに。勇者という一人だけに、背負わせようとしている」

なるほどと、アルフィは思う。

現状を見るのではなく、青年はその伝承に疑問を覚えたのだ。

「魔王の封印は、勇者でなくちゃダメなの？」

「それは分かん。誰もやってはいないからな」

「それなら、勇者は貧乏くじだと思う。いきなり世界を救う大役を背負わされて。……俺なら、たまったものじゃないと思うけどね」

「……まあ、そうだな。王城もきつと尽力してくれるとは思うが」

「勇者に頼らず、自分たちで魔王を封印するすべは考えたのかな？」

すべて勇者に任せきりではないのかな？ ……それなら、勇者は世界の生贄にもなるんだと思う」

やけに実感のこもった言いように、アルフィは面白くなった。

「ずいぶん勇者に肩を持つのだな」

「……そうだね。俺はロマンスだと良く言われる」

少しばかりの沈黙を含んでそう返した青年の顔は、自嘲を含んでいた。

それがどこから来るのかは、アルフィには分からなかったし、知るつもりもなかった。

けれども、アルフィは返答する。

「いいんじゃないだろうか」

「え？」

「私が知る中で、いるかも分からない勇者の心配をする者はいなかったぞ」

おとぎ話はおとぎ話だ。勇者は世界を助ける存在として描かれている。そこに？人格？はない。

「旅人のーさんや。あなたは優しい人だな」

それは世間知らずだからこそ、伝承を知らなかったからこそそうやって考えられるのだ。そしてアルフィは人とは違う考え方をする人を、好ましく思う。

「勇者選定の儀を受ける者たちは、みなそこまで考えてないさ。世界を救おうと思っている者は……いるのかもしれないが、大半は王城から出たお触れにつられてやってくる」

「……お触れ？ って、たしか」

「？勇者になり、英雄になる者に褒美を遣わさん。勇者の願いを叶えよう？そういうお触れだ、聞いてないかい？」

「聞いたことあるかも」

人々に？魔王復活？という現実味がない分、そういったお触れにつられて冒険者はやってくる。英雄譚に憧れ、金に酔い、地位を求め、様々な者が？聖剣？に手をかける。

「だからこそ、聖剣は抜けないのかもしれないな」

世界を救うために選ばれる勇者だからこそ、邪念に満ちた者は選ばないのかもしれない。そう信じたいと、アルフィは思う。

そう、だから。

「にーさんなら、聖剣が抜けるかもしれんよ？」

くすくすと笑いながらそう告げると　青年は、少しだけ嫌そうな顔をした。

「よしてくれ。世界を救うなんて大役、俺には無理だよ」

「選定の儀には行かないのかい？　誰でも無料でできるらしいぞ？」

「そういう貴女は行かないの？」

返され、アルフィは笑いを止めて青年を見る。先ほど同じことを聞かれたたと反芻し、また同じようにニイと笑みを浮かべた。

「行かんよ。私がこの街に来たのは別の目的があるからな」

「……別の目的？」

「そうだにーさん。面白い話をさせてくれたついでに、ひとつにーさんに頼みがあるんだが」

唐突に思いついたことだが、それが良い思いつきではないかと感じ、アルフィは嬉しくなった。頼みごと、とオウム返しに呟いてこちらを見やる青年のほうへ身を乗り出し、アルフィは目を細める。

「おにーさんや、腕は立つかい？」

「……えーと、それは、」

「行きたい場所があるんだが、少しばかり治安が悪いらしい。そこに行くまで、護衛として雇われてくれないか？」

きよとん、と青年は目を見張る。畳みかけるようにアルフィは言う。

「その代わり、美味しい物が食べられる店を紹介しよう」

報酬はその情報でいいかと、そんな無茶苦茶な要求をするアルフィの顔を、青年は呆けたように見つめた。

炭火烧ハンバーグ 3

黒い鉄板に、じゅうじゅうと小気味よい音が聞こえる。

程よく焼き色のついた肉の塊は、はちきれんばかりの大きさだ。そこに秘伝のタレをのせて、ナイフとフォークでそつと割ると、あふれ出た肉汁が鉄板の上で弾ける。

付け合せの人参とほうれん草も鮮やかな色をしているし、マッシュポテトも綺麗な乳白色をしていて、添えられたバターが溶け出しているのがたまらない。

なにより値段の割に量が多い。まわりに添えられたごはんも、黄色色のコンソメスープも、サービスの飲み物も、通常の定食屋と比べると少し大きめだ。

「いただきます!」

「……いただきます」

語尾に音符をつけ、上機嫌に手を合わせるアルフィリアと、半分呆然とした顔で、つられたように手を合わせる旅人の青年。

少しばかり奇妙な組み合わせの二人がいるのは、裏道にあるこじんまりとした酒場だった。

「まさかキミの用事が、このハンバーグ定食なんてねえ」

ハンバーグを切り分けながら呆れたようにそう呟く旅人の青年は、フードを外して顔をさらけ出している。フード越しで見た時も若いと思っただけだが、明るい場所で見ると若干あどけない顔立ちだった。

襟足までの青灰色の髪はさらさらとしていて、深い青色の瞳との組み合わせは、しかるべき格好をしていれば感嘆の息を漏らしてしまう美丈夫である。

しかしながら多少汚れた旅人の格好で、いささか呆れた顔をしているので、見た目よりも親近感を覚える。

「なにを言う。この炭火焼きハンバーグはガイドブックにも載る知る人ぞ知る名店だぞ。夜は酒場になるこの店は昼にしか定食を出さないが、炭を使ってじっくり焼くこのハンバーグは本格派で、店長のつてで良い肉を使っているし、何よりボリュームもある。しかも安い。

だが店構えが裏道でな。うら若き乙女が一人で入るには治安が悪いのだ」

息を吐く暇もなく力説するアルフィは、しかしながら目の前のハンバーグから視線を外さない。小さく切った欠片をフォークでさし、茶色いソースをすくって口に運ぶ。

じわ、と、肉汁とうまみが口の中で広がった。

「くう、やはり美味しい！ ガイドブックで見得からぜひ食べてみたかったんだ！」

「……うん、そうだね美味しいよ。さすが本に載るだけある」

呆れを引きずるものの、青年も目の前の昼食を堪能することにしたらしい。一口食べて顔をほころばせ、うんうんとアルフィも同意する。

「肉汁がじわつと溶けて、なにより焼きすぎないこの感じがちょうど良い！ 口の中で炭焼きの甘みが広がってくる」

「付け合せの味もシンプルで、それが引き立ててるね。うん、このスープもあっさりしてて美味しい」

「うーんやっぱり正解だったな！」

にこにここと、幸せそうにご飯を頬張るアルフィを見て、青年は少しだけ眉を下げて微笑んだ。

「けどさ、俺も大概だけど、キミも変な人だよな」
「うん？」

「見ず知らずの人、しかも男だよ？ を、昼食に誘うなんて。会って間もないのに護衛として着いてこないかい？ ってさ」

マツシュポテトを嚙下して、アルフィは顔を上げた。そして青年を見て首を傾げる。

「そういえば自己紹介がまだだったな。私はアルフィリア・ハーゼル。観光目的で旅をしていて、明日付けで冒険者になる予定だ」

「え……と、そういうことじゃ……明日付け？」

「あいにく私も身分証を持っていないくてな。今日、冒険者ギルドで受付を済ませてきた。明日から私もしがない冒険者さ」

きよとんとする青年を見るに、その制度も良く知らない可能性が高い。

「その説明は後でしてやろう。今は美味しくご飯が食べたい」

「あ、うん……すみません」

「謝らなくていい。それに、私はにーさんの人柄を直感的に気に入った」

ぱくりとハンバーグを一口放り込み、じっくり味わってから、首を傾げる青年を見やる。

「気に入った、って？」

「にーさんは変な人だが、少なくとも悪い人じゃないだろう、ってな。これも正解だと思ってる」

「……どうしてそんなことが分かるの」

また呆れたように目を細める青年の顔をしっかりと見て、アルフィは己の心情を語った。

「美味しいものを一緒に美味しいと食べられる人に、悪い人はいないだろう」

「……………」

青年が、ぽかんと呆けた顔をした。

アルフィは気にせずぱくぱくと食事をする。

「せっかくの美味しいものが冷めてしまっぞ?」

青年は何かを言いかけて、やがてゆるく首を振った。いろいろと諦めたらしい気配を漂わせ、それから苦笑を浮かべてアルフィを見る。

「ユークレース・ヴァルクレイ」

「ほう?」

「これで、見ず知らずの人じゃなくなっただな」

名乗る青年は、なんだか吹っ切れた顔をしてスープをすする。アルフィは口元を吊り上げた。

「改めてよろしく、ユークレース。私のことはアルフィと呼んでくれ」

「よろしくアルフィ。俺のこともユークでいいよ」

「いやー、美味かった!」
「そうだね。美味しかった」

にこやかに笑いながら宣言したアルフィリアを、同じくにごやかに笑いながらユークレースが同意する。朝食を食べ終えた二人は、酒場のドアを出て満腹感に息を吐いた。

ユークは片手を腹に当ててゆっくり撫でながら、少し意地悪そうにアルフィを見た。

「しかしさ、キミ、良く食べたね。俺でもお腹いっぱいなのに」
「うら若い女性が小食なんて誰が決めた。お前もちやつかりテイクアウトなんかして、足りなかったのではないか?」

ユークの言うとおり、アルフィは先ほどの成人男性でさえ残す者もいるという量をぺろりと平らげている。しかしながら満腹で動けないということもなく、いたって元気そうだ。

そしてアルフィの言うとおり、ユークの片手には別で頼んだサンドイッチの袋がある。この酒場は働く男たちのためにテイクアウトもしているらしく、その中でユークは一番人気のハンバーグの入ったサンドイッチを選んでいた。

昼飯用の作りたてなので、夕飯時には冷めてしまっただろう。それなのに購入ということは、この後どこかで摘まむのではないかと、そう踏んだのだが。

ユークは意味ありげに微笑んだ。そして、

「……そうだな。アルフィならいいかもしれない」

「ん？」

「ねえアルフィ。今から少し時間はある？」

その問いに、アルフィは一度腰にはめた懐中時計を手に取り、そして空を見上げた。

陽はまだ高く、暮れそうにない。

「予定はないが、なんだ？ デートの誘いか？」

「そうだねえ。デートでもいいかもしれないけど」

茶化して肩をすくめるアルフィに、ユークはくすくすと笑ってそう言う。

「いろいろ教えてくれたお礼と、美味しいお店を教えてくれたお礼に。……俺からも一つ、アルフィに教えてあげようと思って」

「うん？ 何をだ？」

「明らかに不審な俺を、少しでも信じてくれたアルフィを、俺も信じてみようかと思って」

穏やかに返す表情は、けれどどこか真剣な目の色をしている。

茶化すのを止めてその視線を受け止めたアルフィに、ユークは、ゆっくりと言った。

「変なことはしないと約束する。少しだけ俺に付き合ってくれる？」

裏路地を抜けると、人気のない空き地がある。家と家の隙間に、四角い広間が空いていた。

置かれた木箱に腰を下ろしたユークに習い、アルフィも隣に腰を下ろす。今は陽が高いからいいものの、夜になればならず者がいるらしい、石畳には靴の跡がいくつか残っていた。

「昼間だから良いものの、あまり長居したくない場所だな」

「そうだね。でも人目に付きたくなかったから」

こう言われてしまえば、アルフィとて女性である。身の危険を感じるはずだ。けれどそう言う青年が穏やかな顔で、それでいてさりげなくアルフィと距離を置いているため、またユークの纏う雰囲気からか、危険な空気は感じられなかった。

「さてアルフィ。ここまで強引に引つ張っておいてなんだけど、キミはこれから俺が見せることを、秘密にしてくれると誓うかい？」
「いきなりなんだ。それこそ出会って間もない者にふっかける話題ではないな」

いささか呆れてそう返すアルフィに、ユークは苦笑を浮かべる。
「そうだね。でも俺も、そんなアルフィの人柄を気に入ったみたい」

……
美味しいものを美味しいと言って一緒に食べてくれる人に、悪い人はいないだろう。

先ほどアルフィの言った言葉を返されれば、ため息をつくしかない。

「……口約束にしてしまえば軽く聞こえてしまうが、それが必要とあらばこう答えよう。」

分かった。誰にも言わないと約束する」

「……良かった」

不思議と、アルフィに恐怖はなかった。この青年のことも、出会う間もないとは思えないくらい、信頼しきっていることに気が付いた。

いけないと内面で警告音がする。この世には悪い人間がたくさんいる。人の良い顔で、人を騙す者もたくさんいる。こんなに簡単に信じていいのかと。

……けれども、とアルフィは思う。

青年の瞳は、綺麗だったのだ。

騙されてもいいかなと、思える程度に。

ユークはおもむろに、荷物を床に置いた。

噴水の頃より持っていた鞆のうちの一つ、四角い箱でできたそれを足の下に引き寄せる。

それからかこん、と、側面のふたを開けた。

「……お待たせ、ジーク。ごめんな、窮屈な思いをさせて」

いたわるように投げかけられた言葉ののち、ユークは促すようにかこん、と天井を叩く。

アルフィは、目を見開いた。

青灰色のかぎ爪がはい出したかと思うと、鱗に覆われた短い腕が現れる。

蝙蝠のような羽根と、長い首。口元に牙。固い鱗に覆われた尻尾。伝説でしか見なかった、伝承でしか出てこなかった、その描写通りそのままに。

四角い鞆から、小さな？ドラゴン？が、ごそごそと這い出してきた。

炭火焼ハンバーグ 4 (前書き)

流血描写あり

炭火烧ハンバーグ 4

ドラゴンと称してみたものの、アルフィリアはドラゴンを見たこととはない。

いや、この世界に生きる者ならば、誰でもそうであろう。

空を駆ける大きな羽根。爬虫類の鱗で覆われた固い皮膚。獲物を切り裂く鋭い牙。そして小さな腕と、爪。代わりに大きな足。太い尻尾。

その口から吐く炎は地を焼き、咆哮は雷鳴を生む。

空を統べる空の王。

空想上の、そして絵物語で記された？竜？または？ドラゴン？と呼ばれる生き物。

そのはずだった。

四角い箱から這い出てきたその生き物は、腹ばいの姿勢からぼん、と座り込むと、くあ、と大きく口を開けて欠伸をした。それから体の割に小さな羽根をばたばたと動かす。

体は青灰色をしている。いや、光の加減では銀色に近い。頭の後ろに生えるたてがみは陽に透けてきらきらと光っている。大きさは人間の赤子ほどだ。

首をきよろきよろと動かして、その小さな生き物は目をぱちりと開いた。

夕日のような、赤い紅色だった。その深い宝玉がふたつ、くりくりとした目を周囲に向ける。

鼻をくんくんと動かしていることから、周囲を見回しているらしい。

その様子を、優しく微笑みながらユークレースは見下ろしていた。

「……キユ？」

こてん、とドラゴンがユークを見上げて首を傾げた。耳がびくびくと動いている。

それから呆然としているアルフィを見た。またこてん、と首を傾げた。

「キユ？」

「……心配いらない、ジーク。こちらはアルフィリア。さっき知り合った親切な人だよ」

だれ？ とでも言うように目をくりくりさせるドラゴンに、ユークは優しくそう説明した。

それからいまだ何も言わない、言うことができないアルフィに向きなおる。

「……ジークハルト。俺の相棒だよ」
「キユ」

いささかはしよりすぎな説明に、けれどジークハルトと呼ばれたドラゴンは胸を張った。

「……………これは、驚いたな」

頭のまわらないアルフィだったが、ようやく目の前の光景を現実だと認識できたようだ。口を開けたまま素直に感想を述べて、まじまじと足元の銀色の生き物を見る。

「蜥蜴の一種か？ 突然変異で生まれたのか？ それとも新種の魔物か？」

グエ！ と抗議するようにドラゴンが鳴いた。人間の言葉が分かるらしい。

苦笑いを浮かべて、ユークはジークの頭をなだめるように撫でる。

「……………信じてもらえないかもしれないが、マスタードラゴンと呼ばれる高位の魔族だよ。今はなぜかこのサイズになっているけれど、本当は人を四人は運べる成人したドラゴンだ」

ジーク、とユークが呼びかけると、ジークハルトは素直に振り向いた。

「お腹減ったろ。ほら、ご飯だ」

先ほど買っていたサンドイッチの袋を開け、ジークに見せるようにかがみこむと、ジークは目を輝かせ嬉しそうに鳴いた。袋を破いて食べやすいように地面に置くユークへいそいそと移動して、そのままかぶりつく。

機嫌よくサンドイッチを食していくジークを、アルフィはどこか夢見心地で見ている。

「……………ほんもの、なのか？」

「正真正銘の本物だよ。信じてもらえないかもしれないけど……………やつぱりここでは、ドラゴンはいないんだね」

アルフィの反応を見てしみじみとそう呟くユークに、アルフィは目を向ける。

「当たり前だ。ドラゴンは想像上の動物で、魔物ですらこの形状のものはいない。……………しかし驚いた、本当に驚いた。これは希少だな、？ドラゴン型の魔物？なんて」

「……………うーん、ドラゴン型じゃなくて本当にドラゴンなんだけどね」

ユークは多少の訂正をしつつ、手を伸ばしたアルフィをさりげなく遠ざける。

「触らない方がいい。食べているときは気性が荒くなるから、無意識に人を攻撃してしまうかもしれない。ジークは穏やかな性格だけれど、慣れた人じゃなきゃ触らせてくれないよ」

「……うむ、動物の本能というモノか。確かに食べている間は無防備になりがちだからな。」

しかし、ユークは詳しいのだな」

感嘆の息を漏らすアルフィを、ユークはどこか諦めたように肩をすくめる。

「……小さい頃から一緒だったから」

「なんと。このような希少動物と共に過ごしていたのか」

「……俺の居たところでは、ドラゴンは珍しくなかったからね」

「そんな桃源郷みたいな場所があるのか……。うむ、あなたの世間知らずも頷ける。いったいどんな辺境の地から出てきたのやら……。一度は行ってみたいものだな」

ドラゴンに釘付けになってるアルフィには、少し苦々しい顔をしているユークに気が付かない。

「教えること、というのはいはこれのことか」

いやはや、とアルフィはもう一度ジークの背中をまじまじ見て、それからユークのほうへ顔を上げ、にこりと微笑んだ。

「良いものを見せてもらった！ できれば少しだけ触らせてもらえないだろうか？」

「……うん。ジークがいいよって言えばだけど……。それだけ？」

「うん？」

「見世物小屋に行こうとか、王城に持っていきこうとか、誰かに売ろうとか。考えないの？」

いささか緊張をにじませた青い瞳に、アルフィは目をぱちりとさせた。

「お前さんが言ったのではないか。口外しないと約束してくれるか、

と

「……」

「一度した約束は守るさ。それを信じて見せてくれたのだろう？」
食べ終わったらしいジークが、サンドイッチの袋から顔を出し、
ぶは、と息を吐いた。

その様子を見てアルフィが「水でも飲むか？」と水筒を取り出す。

ユークレースはそんなアルフィを見て……嬉しそうに、けれど少し泣きそうに、顔を歪ませたのだった。

結局。

触らせてくれないジークハルトと、なんとか触ろうとするアルフィア。逃げるジークと追うアルフィ。

攻防はやがてユークの傍から離れ、ふたりは狭い空間を一定の距離を保ちつつじりじり一進一退を繰り返している。

そんな呑気な光景が繰り広げられるさまを微笑ましく見守っていたユークレースが、突如笑みを消した。同時に、じりじりと逃げていたジークハルトもぴくりと顔を上げる。

「ん？ どうした？」

ただひとり、アルフィアだけがジークの変わった雰囲気戸惑

っている。

ジークは周辺をくるりと見渡すと、キュウとひと声鳴いた。ユークレースも立ち上がり、「そうだね」と頷く。

「ごめんアルフィ。少しゆっくりしすぎたみたいだ。なるべく壁際に寄って」

「んん？ どういうことだ？」

「ジーク。アルフィを守って」

するとジークは先ほどから逃げ回っていたのなど嘘のようにアルフィの傍へ寄り、服の裾をくわえるとくいくいと壁へ誘導した。つられてアルフィが移動すると、一仕事終えたジークはキュウと誇らしげに鳴いた。

ぱさりと、その横に小さなマントが置かれる。ユークが鞆から取り出して投げたものだ。

「アルフィ、それジークに着せて。ジーク用マントなんだ」

「う、うむ」

命じられるがままマントを着せる（乗せるだけ）と、ジークは器用にその中へ入り込み、フードの部分から顔を出した。そうして見るとフードをかぶった子供のようになる。

ここまで来れば、アルフィとて気付く。気配察知に関しては人並みだが、二人（一人と一匹）の行動から、どういふことなのかを察したらしい。

ユークは先ほどの場所から動かず、けれど鞆の中から細身の包みを取り出していた。それからかすかに笑みを浮かべて、周囲をぐるりと見回している。

「…………… 治安が悪いのは本当だったみたいだね。女の子一人で来させないでよかった」

いつのまにか。
狭い路地の周りに、ならず者が来ていたらしい。

数にして五人。

さして綺麗でもない衣服に身を包み、むき出しの剣を、槌を携え、にやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべる屈強な男たちが、狭い広間の唯一の出入り口を塞いでいる。

「……やさ男に女がひとり。おいおい、迷子にでもなったのか？
こりゃ運が悪かったねエ」

布でぼさぼさの髪を縛った男が、にやにやと笑いながら一歩前に出てきた。

「ここは俺たちの縄張りだ。勝手に入られては困るんだがね」

「それは申し訳ない、知らなかったんだ」

対するユークは穏やかだった。身を強張らせるアルフィを庇うように、少しだけ移動する。

「すぐに立ち去るから、そこをどいてくれないか」

「馬鹿言っちゃいけねえぜにいちゃん。何事もやっちゃいけねえことがあるんだ」

げはは、と下品な笑いを浮かべた別の男が、舐めまわすようにアルフィへ視線を向けた。

「荷物を全部置いて、女も追いてきゃ見逃してやるぜ？」

「もちろん衣服も置いてけや。全裸で街を滑走しても命があるだけマシさ」

愉快そうに男たちは笑う。

それは困ったな、なんてユークレースは肩をすくめる。

「あいにく露出狂の趣味はなくて」

「趣味はなかるうがなんだろうが、どうでもいいんだよ。さっさと身ぐるみ剥いで置いてけや。それともいちゃんも商品になるか？」

その顔なら高値で売れるぜ」

「そりゃいいや。新しい伝手も確保しなきゃいけないしなあ」

「なら顔に傷つけちゃいけねえな。値段が下がる」

余裕すらある男たちとは裏腹に、ユークは酷く落ち着いたものだった。体格差は歴然で、男たちからしてみれば、ユークなど取るに足らぬやさ男なのだろう。

アルフィとて同じだ。身を守る武具を持たぬか弱い女。

けれど。

卑下た視線に晒されようと、アルフィはどこか、冷静になっていた。

それは立ちはだかるユークレースの存在が、その飄々とした態度が、はったりではないものを感じたからだ。

「カシラあ。この女売れますかねエ」

いつのまにか。

ユークと対峙していた男の脇をすり抜けて、頭を剃り趣味の悪い刺青をむき出しにした男が、アルフィに近づいていた。

「上玉とはいえねえが、その筋の者にはよさそうだな。売る前に味見してもいいだろお？」

にやにやと笑いながら男が戯れに手を伸ばす。アルフィは体を強張らせ、壁に背をつけて避けるように後ずさり

「……触るな」

ひたりと、その間の空間に、細い鞘が割り込んだ。

ユークレースが動かぬまま、片手に持つ細い剣で男を牽制している。

穏やかな色を持つ瞳が、冷たい光を帯びるのを感じることができたのは、はたしてここにいたのか。

空気を変えたその一言に反応したのもまた、男たちの方だった。

「……なめたこといつてんじゃねえよにいちちゃん。それともアンタが相手してくれんのか」

ぐいと、ユークの襟首が引き上げられ、歪んだ男の前に引きずり出される。

「……五体満足でいてえなら大人しくするんだな。暴れるならお前さんのその指、一本ずつ切り落としてやってもいいぜ」

ざらりと光る曲刀は、手入れも満足にしていなかったところどころ錆びているものの、男の言葉が嘘にならないことを物語る。

「おい、押さえつける」

男の命令と同時に待機していた他の者が動く。ユークを縛り付けるために。

「……いつでも、どこでも、どの世界にも、」
ぼつりと、ユークは呟く。

「おんなじような輩はいるものなんだな」

「あん？」

聞こえなかったのか、男が眉を寄せる。けれどユークは、構わなかった。

ただ、笑った。

「先に手を出したのはそつちだからね」

瞬間。

鈍い音を立てて、ユークの襟首をつかんでいた男の顎が、がくんと上にあげられた。

襟首を掴まれた腕を片手に持ち、軸にして体を跳ね上げ、ユークが男の顎に膝を叩きこんだのだ。

びり、と襟首が裂ける音と、顎の骨がきしむ音。

中空の不安定な姿勢から、ユークの体がそのまま後ろに倒れる。

そのまま、呆気にとられたすぐ後ろの男の肩を掴むと、

「よっ」

反動で後ろにそれる顎を打たれた男を足場に、逆立ちの要領で反転、くるりと男の後ろへ回った。

「なっ」

声出した男の肩を掴んだまま、その腕を後ろからぐいと掴み、

「っと」

足払い。

膝裏を狙ったそれは呆気なく男のバランスを崩し、男が宙に浮く。背中から地面に叩きつけられるその横へ回り込むと、ユークはそのまま持っていた鞘を男の咽元に落とした。

喉仏が潰れる音がし、男の口から唾が溢れる。後頭部から叩きつけられ、がくん、と男が白目をむく。

瞬間。

大の男が二人、地面に叩きつけられる音が響いた。

「つてめえ！！」

ようやく動き出した右側の男。人をなぐり殺す武具の鉄槌を振り上げ、地面に着地したユークへ襲い掛かる。

遠心力を伴うそれは、かするだけでも人の体を吹き飛ばす。

だがユークは避ける仕草をしなかった。ただすいと、その大槌に向かって体を流した。

そして、振り下ろされる動作のそれを、ひらりと風のようにかわした。ぎりぎりまで、引き付けて。

攻撃された直後の男の体。大槌を振り上げる仕草は、すなわちその後の隙の大きさを現す。

しかし左の男はそれすらも呼んでいる。攻撃をした直後を狙う者をカバーするように、その剣を掲げて突進。かわしたユークの喉元めがけ、咆哮を上げて振り下ろす。

カン！

澄んだ音を奏で、ユークが片手に持つ鞘に包まれた剣で、その切っ先を受け止めた。

そして、

受け止めた剣の鞘から、流れるように銀色の刃が滑る。鞘を受け止めたままの格好で、ユークはおもむろに剣を薙ぎ払った。

「……ギヤア！」

蛙の潰れたような悲鳴が聞こえ、男が片目を押さえる。ユークの切っ先が目の前の男の顔を切ったのだ。

ひるんだ隙に飛ぶユーク、片手に鞘、片手に細剣。飛び散るわずかな血、剣の男は後退、そして鉄槌の男は、

「よくもっ！！」

鉄槌を振り上げる。ユークへ向かって。

ユークはそれを、鼻の頭ぎりぎりでかすめたその槌を後ろに跳躍してやりすごし、くるりと反転、その反動のまま男へ倒れこむように懐へ入り込み。

その腕を振るうと同時に、男の手首から血が噴き出した。

悲鳴を上げる男の顎下に、今度は剣の鞘を突き立てる。がつんと急所に入ったそれは、男の息を奪うには十分だった。

ぐらりと崩れる体。ユークよりも体格の大きかったそれは、そのまま懐に居るユークに向かって崩れ落ちる。

巻き込まれる寸前。

片足を軸にして、倒れこむ男の側面に綺麗な回し蹴りを叩きこむ。そのまま男は、後退した剣を持った男を巻き込み、石畳に崩れ落ちた。

「ご丁寧に。」

鉄槌がその二人の頭の上に落ち、重量もあるそれは一人を昏倒さ

せ、一人を首で地面に縫いとめる格好となる。

あまりにも綺麗な一連の動きに、アルフィは声も出せないでいた。ただ目の前の光景を息もせず見ていた、が。

ぐい、と襟首を引かれ、思わず小さな悲鳴を上げる。

「それ以上は止めるオ!!」

太い腕がアルフィの首に回り、そのまま押さえつけられた。ぐ、と息が詰まる。ユークが顔を上げる。

「女がどうなってもいいのか!!」

抵抗しようとした腕も捕まえられ、そのままぎりぎりど首を絞められた。耳元に生暖かい息がかかる。

「……そうだ、そのまま動くな。て、てめ、よくもカシラたちを……許さねえからな、てめえは売りもんにするのは止めた、そのままぶつ殺してやる」

人質を取った余裕だろうか。先ほどアルフィに近づいた最後の男が、アルフィを見せつけるようにぐい、と引つ張った。

アルフィは首の圧迫感に息ができず、顔を歪める。男の息が生臭い。興奮しているのか、締め上げる腕も手加減を知らずぎりぎりど締め付けていた。

「いつ……」

「女が大事なら今すぐ武器を捨てる! んで大人しくしやがれ!」先ほど昏倒させた男も、唸り声を上げてきた。このまま時間が過ぎれば、恐らく目覚めてしまうだろう。

ユークは構えていた剣を下ろす。静かな瞳で、アルフィを拘束する男を見ていた。

「どうした武器を捨てる! 女がどうなっても」

唾を吐いて脅しをかける男の声が、ふいに止まる。そして。

がぶ。

「……………でええええ！！！」

途端、悲鳴を上げた。

その瞬間アルフィの拘束が緩む。その隙を逃すはずがない。

アルフィは一度頭を下げると、そのまま勢いよく顔を上げた。ごん、と鈍い痛みが走るとともに、更に男の拘束が緩む。

その腕から抜け出そうと身をよじる。その瞬間、銀の閃光がアルフィの顔の横を走った。

ユークが、男の脳天に向かって剣を振り下ろしたところだった。

いつのまにか鞆に包まれていた剣は男の真上を直撃。そのまま、ぐらりと倒れて、石畳に倒れこんだ。

「大丈夫、アルフィ？」

「あ、うん、まあ」

抜け出した拍子に地面に倒れたらしい。手について呆然としているアルフィに、心配そうな顔が覗きこまれる。

ユークレースだった。

「ごめん、怖い思いさせた。もう少し早く気が付いてれば、こんなことには」

「い、いや大丈夫だ。この通り怪我はないのだし、あれは不可抗力

でもある」

沈んだ顔をして謝罪するユークに、アルフィは慌ててフォローを入れる。それからユークを促して立ち上がると、改めて周りを見下ろした。

狭い広間に、男が五人、重なって倒れている。

呆気ない、動作だった。時間にしてわずか数分のことだ。

流れるような仕草で、ユークは五人の男を沈ませた。

「よくやった、ジーク」

「キユイツ」

見ると、アルフィを拘束していた男の下から、フードをかぶった子龍が這い出してくる。どこかを噛みついたらしい。

しかし昏倒させたとはいえ、大男たちだ。悠長にしていればすぐにでも目を覚ますだろう。

ユークはジークにねぎらいの言葉をかけると、すぐさま行動した。した。

すなわち、昏倒している男たちの衣服を破り出したのだ。

「な、なにして、」

呆氣にとられるアルフィには答えず、ユークは慣れた手つきで、その男たちを衣服で縛り上げる。

あまりにも自然で手馴れて、しかも早い動作にアルフィは付いていけない。

「さてこれでよし……こいつはしばらく起きないだろうからいいか」

「……ユークさんや。なにをしてるんだい」

「ねえこの国って警邏とかいないのかな。悪い人って誰に言えばいいの」

きょとんと言うユークに毒気を抜かれ、アルフィはため息をついた。

炭火烧ハンバーグ 5

ユーク（と服に隠れたジーク）を引きつれて警備兵の詰所へ向かうと、驚いたことに先ほどの五人組は冒険者ギルドに依頼された「お尋ね者」だった。

なんでも街に降りていた貴族の物を盗んだらしい。

これ幸いと冒険者ギルドに引き返し、依頼内容を確認すると、依頼は昼ごろに張り出された新品だった。いくつか参加の印があるが、完了の印はない。

アルフィリアはすでに手続きを済ませてあるので、カードが無くても依頼を受けることはできるらしいが、ユークレースは違う。彼は冒険者カードを持たないので、この依頼を達成しても報奨金を受け取ることはできない。

ただ働きにしてなるものかと、アルフィはすぐさま依頼に参加し、その報奨金をとりあず自分名義で受け取ることにした。ついでユークを受付に引つ張り出した。

「とりあえずこの人を冒険者にしてください」

「……………そうか、いい護衛を見つけたなお嬢ちゃん」

熊のような体格の意外と人の良かったギルドマスターは、数時間ぶりの再会に微妙な表情を浮かべた。

アルフィは意気揚々と、依頼を受けた証である依頼書を片手に警備兵の詰所へ向かう。あらかじめ警備兵を一人、現場に待たせていたため、その兵士と合流し証拠を確認させて依頼達成。

その間、ユークは言われるがままギルドカードの書類にサインしていた。

お尋ね者といえど報奨金は微々たるものだ。けれど思わぬ臨時収入にアルフィリアは上機嫌だった。

「例えばなにかの拍子に警備兵のお世話になった時、身分証を持たぬ者は、ならず者か盗賊とみなされてしまう。ようは怪しい人物として目をつけられてしまうんだ」

一連の作業を終え、アルフィはユークを伴って最初の公園に来ていた。噴水の階段に腰を下ろし、興味深そうに聞いているユークへ向かって説明する。

「身分証を作る方法はいくつかあるが、一般的なのはその国の住民登録をすること、ギルドに所属すること。住民登録とはその名の通り、その国の住民になりたいという書類を役所あるいは王城で申請する。審査が通ればその国で暮らせる。そして住民票がもらえる。この国の住民であるナントカです、というね」

登録方法、本人の証明方法は割愛する、とアルフィは言い、そして続ける。

「ギルドと呼ばれる制度がある。職業を持つ者はどこかのギルドに属すると、その証としてギルドカードをもらえる。ようはそれが商売をする証であり、その者の身分を現す身分証になる」

例えば永住しない旅の商人、楽団、または旅人などはギルドカードが身分証になる。ギルドカードは職業の分存在するため、住民票と二重で持っていて構わない。

「ギルドカードは報酬をもらえる証にもなる。

私たちが所属したのは冒険者ギルド、永住しない旅人が主に所属するギルドだが、彼らが金に困って強盗などに走らないよう、仕事を

斡旋するのも主な役割だ。

冒険者ギルドは街の様々な依頼を請け負い、ギルドに所属する冒険者に振り分ける。依頼の内容はお尋ね者の逮捕から迷い猫探し、遺跡探索、魔物の討伐、商人の護衛など様々だ。主に住民の手に余る力押しが多い。

依頼には難易度によりランクが宛てられる。DからSSまで。基本的に冒険者はどの依頼を受けても構わないが、Aランクより上だと命の危険も伴う危険なものである。よく考えもせず受けると冗談ではなく命を落とす。達成した依頼のランクによって報酬がもらえる。そしてカードに履歴が残る。

上位のランクばかりを達成している冒険者は拍がつく」

「拍がつくとどうなるの？」

「依頼者側から名指しで指定してくれ、その依頼を独占できたり、報酬をこちら側の意向で吊り上げることができる。」

普通、依頼者は依頼を受ける者を確定できないから、特に取り決めのなかった場合早い者勝ちになる。今回の件なんかはそうだな、お尋ね者を早く見つけ、警備兵に叩き出したものが報酬をもらえる。そして報酬は依頼者が決めたもの以上にはならない、ま、特別報酬などを事前に話し合っていれば話は別だが」

ふむふむ、とユークは頷く。

アルフィは一息ついて、手に持ったクレープに嚙り付いた。

「今回アルフィが俺にしてくれたのは、俺がギルドに所属できるようにしたんだね」

「でないとユークが報酬をもらえないからな。それに身分証を持たないと言っていた。冒険者を名乗るならば持つていて損はない。」

冒険者ギルドは一番ギルドカードが作りやすいからな。それがどんな人物であろうと」

アルフィは意味ありげにそう笑い、ユークは眉を寄せた。

「……つまり、どういうこと？」

「冒険者ギルドは住民票と違って審査が甘い。あまり大きな声で言えないが、偽造しても通ることだってある」

「ふうん」

「己の実力のみで生き、命を懸ける者たちだ。過去に何をしていたかなど、依頼者にとってはさして重要でもないんだろう」

なるほどね、とユークは息を吐く。

「俺みたいな不審者にはぴったりだ」

「私みたいな不審者にもぴったりだ」

くすくすと笑うアルフィを、少し意外そうにユークは見やる。

「そういえばアルフィも、今日まで身分証を持ってなかったって言うってたね」

「私も辺境の地から出てきたからな。こういった制度は大きな国がやるもので、まだ地方の土地では整備されていなかったりする。旅をして商売をやる者はギルドカードを作るために王都へ下りてくる」

「……つまり、大きな都市を通らないなら必要ないってわけか」

「そうだな。しかし今回、私が行きたい場所は通行証として身分証提示が必要でな。ちょうどいい機会に作らせてもらった」

そっか、とユークは相槌を打ち、手に持ったクレープをかじると、そのままこっさり下へ下ろした。

足の間にはジークが居て、ぱくりとそのクレープにかじりつく。

ユークのマントで微妙に見えづらく、はたから見ると犬か他の動物を手懐けているように見える。

「しかしさ……アルフィって本当に冒険者？」

「うん？」

「人が良すぎでしょ。今回だって何も言わずに自分だけで報酬を独り占めできたのに。俺が報酬を受け取れるように世話してくれるなんて」

呆れたようにそう零すユークに、心外だな、とアルフィは肩をすくめた。

「今回私は何もしてない。ユークが全部倒したんだ。」

……
「そういえばユークはすごいな。あれだけ腕が立つとは思わなかった」

「ん？ ま、一応は護衛として雇われたんだもの。仕事しなきゃね」「なにか剣技を？」

「独学だけでも、一応剣士は名乗れると思うよ。……でもそこも心配でさ、アルフィ、戦う術は持つてるの？」

首を傾げるユークに、アルフィはいささか唇を尖らせる。

「これでも一応旅人をしてきたんだ。今回は何もやらなかったが、私だってあのならず者相手に負けなかった。……まあ、あんなに簡単に倒せるとは思ってないが」

微妙に信じていないような目で、ユークはアルフィを見た。

「……ユーク、信じてないな」

「……うん、信じてない。ついでに何もしていないのに突然『お腹減った』と言いだして、あれだけ食べたのに今クレープ食べてるのも信じられない」

「ユークだつて食べてる」

「俺はジークとはんぶんこしてるの」

証明するように、ジークが差し出されたクレープをぱくぱくと食べた。ジークは何も言わないが、「美味しい、美味しい」とでも表すように尻尾が揺れていて、音符マークでもつきそうなくらい盛大な食べっぷりだ。

「……甘いものは別腹だ。それにいろいろ考えて頭を使った、糖分が欲しかった」

ふん、とそっぽを向いて、アルフィは生クリームたっぷりの苺クレープにかぶりついた。

屋台で気軽に買えるクレープは庶民のおやつで、種類は様々にあ

る。

ひんやりとした生地に生クリームの甘さとコクが広がるが、若干クリームが甘すぎる気がして、70点というところだなとアルフィは評価する。

「まあそれについてはお世話になったからお礼言っけど」

ちなみにユークはラズベリーのクレープである。アルフィのものと比べると甘さ控えめらしい。

「……さて。ユークさんや」

「うん？」

「これからどうするのだ？ いや、勢いで冒険者にしてしまったが、良かったのかと」

カードができるには最低でも一日かかる。ギルドのおじさんに聞くと、アルフィのものと一緒に出来上がるらしい。

例えばこの後ユークが街を出る予定だったら、余計な足止めをしてしまったと同然だ。

……そういえば、とアルフィは思う。そういえば、もうそろそろ日が傾く時間帯だ。夜の街に用事がないのであれば、ぼちぼち宿に帰っても良い頃かもしれない。

ずいぶんと長い間、一緒に居たのだと感慨深く思う。

「冒険者になったのは、むしろ有難いよ。俺には身分証とかなかったし、目的とかなないから特に急ぐこともしてない」

ユークはそう答え、食べ終わったクレープの包装紙をくるくるとまとめた。足の下ではジークが満足そうにしている。

「宿は取ってあるのか？」

「うん。入り口あたりのとこ」

「そうか」

アルフィの取った宿とは違うところだ。

ニユアンスでなんとなく察したらしい。ユークはアルフィを見た。
「宿に帰るの？」

「ああ。……目的は達したからな」

「なら、宿まで護衛させて」

「別にそこまでしてもらわなくても。ここは街中だ」

「依頼したのはそっち。最後までお仕事させてください」

よっこいしょ、と立ち上がったユークを、アルフィは少し複雑な表情で見上げる。

なんとなく。

……なんとなく、少しばかり寂しいような気がしているのだ。

「すまない」

「何を謝るの。今までのこと考えたら、むしろ俺がアルフィに感謝しなきゃいけないんだよ」

見透かすように、ユークはくすくすと笑った。

結局、アルフィリアの泊まる宿の下にある食堂で夕飯を共に食し、ユークレースはジークハルトをマントの下に隠して帰っていった。とはいうものの、ユークとはまだ縁が続く予定だ。なぜなら明日、冒険者ギルドへ行って報酬をもらい、それを山分けしなければならぬ（カードができていないので達成の登録ができず、報酬は明日カードができてからということになっている）。

達成者はアルフィになっっているので、その場にユークがいなければアルフィがすべて受け取るようになってしまう。なので、明日ギルドの入り口で待ち合わせだ。

湯を浴び、楽な格好に着替え、宿の自室で荷物の整理をしながらアルフィは一日を反芻する。

思い返せば返すほど変な人だった、と思う

この世界の常識や当たり前のことを知らない。？知らな過ぎる？。演技にしては素直すぎる。普通、人間は自分に不利になることを隠すものだ。特に初対面の人間同士では。

けれど、ユークは誤魔化すことをしなかった。

その行動は、旅をしている人間として 冒険者として、純粹すぎる。

しかも、？ドラゴン？を連れていた。

ドラゴンなど、アルフィは初めて見た。おとぎ話の中でしか知らない？伝説？だ。そしてそのことを、ユークは疑問に思っていないらしかった。

自分が？伝説？を連れていることの重大さを、彼は知らない。

なぜなら、その？ドラゴン？こそ、聖剣を抜いた勇者の前に現れるはずの？御使い？だと言われているからだ。

はつきり言おう。

ユークレースは「怪しい」。

変人などという言葉を通りし、襟首掴んで王城へ連行すれば不審者で牢屋行きになるんじゃないかと思うくらいに、「怪しい」。ついでにそのまま聖剣も抜けるかもしれない。……あながち冗談ではない。

しかしながら。

アルフィとて、人に誇れる過去を持っているわけではないのだ。

アルフィは、境界のド田舎から外へ飛び出してきた。小さいころはそれこそ町なんて年に数回しか行ったことがなく、森の中、育て

の親と二人きりで生活してきたようなものだった。

だから外へ飛び出した時、世界の大きさに目がくらんだ。

勇者の話などは知っているものの、例えば貨幣価値、ギルドのことなど、ユークの同じように何も知らなかったのだ。

知らないがゆえに、白い目で見られたことも、冷たくされたことも、怪しいと危つく疑われて牢屋に入れられそうになったこともある。

辛い現実の中、失敗を繰り返しながら、ひとつひとつ覚えていった。時には騙されてお金を盗られ、時には親切な人に教わりながら、少しずつ、少しずつ。

だからだろうか。

ユークを放っておけなかったのは、昔の自分と重なったからだ。

アルフィも、もちろん疑う心は持っている。初対面の人間に対して親切にするにしても、それなりの分別をわきまえて接するだろう。今回、ユークが心配するほどに、アルフィはユークの世話を焼いた。

誰にでも同じようにするかと問われれば、否と答えられるだろう。今回は？ユークだから？手を貸した。その一言に尽きる。

どう見ても、ユークレースが嘘を言っているように見えなかったし、悪い人にも見えなかったから。

「これで騙されてるなら、私は間抜けだな」

人の良い顔をして人を騙す人間は大勢いる。ユークのあの性格がすべて演技だとしたら。アルフィは降参するしかない。

自嘲した笑みを浮かべ、アルフィは首を振った。

念のため戸締りの確認をして、いつも通りダガーを枕元に置いた。

明日はギルドでカードを受け取って、街で買い出しをする。それから昼になる前に出発しよう。

……ユークは、どうするのだろうか。そんなことを思い浮かべながら、アルフィは眠りについた。

翌朝。

冒険者ギルドの入り口で、見覚えのある青灰色の髪を発見。足元には四角い鞆。

「おはよう、アルフィ」

すでに来ていたらしい青年は、にっこりと笑いながら朝の挨拶をした。

炭火烧ハンバーグ 6

「ほらよ。これがお前の証明書だ」

カウンターのの上に置かれた四角いカードには、冒険者ギルドの文字と、名前が記されている。

名前の横に白色の、長方形のマークが刻印されていた。促され、そこに指を置く。

するとピリツ、と指が強張り、長方形のマークが青い光を帯びた。その光は筋となってアルフィの指に一瞬だけ纏わりつき、しゅるしゅると消える。

指を離すと、白色だった長方形が薄い緑色に変わっていた。

ギルドのマスターはそれを見届けた後、簡単な説明をした。

「これで登録は完了だな。」

横の印はルーキーの証だ。達成した依頼のランクによって色が上書きされる。緑はDランクの色だな。

色は薄緑、濃緑、青、赤、銀、金と変わっていく、貼り出された依頼ボードに色が割り振ってあるからそれを参考にしな」

続いてマスターは、昨日アルフィが達成したサイン済み依頼書をカウンターの横にある小さな箱に広げて入れ、ボタンを押す。

ぼう、と赤いランプが灯ると同時に、マスターはアルフィのカードを箱の上にある切り込みに滑らせた。

ぴ、という音がする。

「昨日の依頼達成を登録した。ほら、これが報酬だ」

アルフィの前にカードと、いくつかの銀貨を置いていく。受け取りながら、アルフィは興味深そうにマスターの操る装置に視線を向けた。

「ずいぶんと面白い魔法なんですね」

「何年か前だがな、奇才と呼ばれる変人魔法使いが開発した？トーロクソーチ？だそうだ。まあ、おかげでこっちはいちいちカードに書き込む手間がなくなったし、楽になったもんだよ」

そこでようやく、ギルドマスターはアルフィの横に立ち、目を丸くしている青年の存在に気付く。

「……………どうしたにいちゃん、毛の逆立てた猫みたいな目エして。そんなに魔法が珍しいか？」

「指で触れたのは小さな魔法装置だ。最初に触れた人間の？情報？を登録する。別の読み取り専用装置にて、本人の指とカードの情報を？照合？する。それが本人の証明になる」

やがて冒険者ギルドを後にして、二人は近くの食堂で朝食を取っていた。

昨日の説明時、割愛したことをアルフィは説明する。

「この魔法に触れたのは初めてか？」

「……てゆーか、魔法つてのを初めて見た」

なにそれ、と首を傾げるユークを、アルフィもまた首を傾げる。

「魔法を知らんのか。また面白い過去を持つてるな。」

……具体的に説明しろと言われたら困るが、特定のキーワードをもちいて発動する超自然現象、つてやつかな」

「……特定のキーワード？」

「魔術言語と言われるものだ。知っていれば初心者でも扱えるが、特定の発音と呼吸が必要だ。また何故か体力を著しく消耗するから、一般人にはお勧めしない。下手すると衰弱して命を落とす」

ユークが眉を寄せた。何それ怖い、と呟いている。

アルフィは一息入れるため、目の前のコーヒーをすすった。

「さっきのはあらかじめ組み合わせた魔術言語を刻み込んで、特定の動作をすると発動するようにした魔法装置だな。詠唱の必要がないので便利だが、設置にはかなり費用が掛かるから普通の人じゃ手を出せない」

「……魔法つて、誰でも使えるの？ 俺でも使えるかな」

「キーワードを知って、決められた発音と呼吸で詠唱すればな。けれど組み合わせが複雑だし、難しいから、訓練された者でないと予期せぬ効果が現れて暴走したりする。興味本位でやるならお勧めはしない」

「……そういうもんか」

残ったパンの欠片を口に放り込み、はぐはぐと咀嚼して、飲み込んだユークがそこで首を傾げた。

「アルフィは使えるの？」

「………あー、まあ。一般的なやつなら」

「へえ、すごい」

目を丸くして純粹な憧れを見せたユークに、アルフィはいささかばつの悪そうに視線を逸らした。

魔法は便利だが扱いが難しい。

先ほど言ったとおり、ひとつでも詠唱を間違えれば暴走し、予期せぬ効果を生み出すからだ。

それゆえに、人々が使う？魔法？がらみのことはすべて、『魔術師ギルド』への登録が義務となっている。（冒険者ギルドの登録装置も、魔術師ギルドに申請を上げて使用許可をもらっている）

申請なしで魔法を扱う場合、魔術師ギルドから調査が入り、場合によっては投獄され罰を受ける。

他のギルドとは違い、かなり厳しい管理体制をとっているのが通例だ。

魔法装置の理論が開発されたおかげであるように一般人でも使用できるようになり、身近なものとなったが、そんなもろもろの理由から魔法自体を扱える者はまだまだ少ない。

便利だが謎が多く複雑な魔法を扱う者は自然と研究者が多くなり、また変人が多いとされる。ちなみに登録装置を開発した魔法使いは人間嫌いで有名な変人らしい。

魔法使いと聞くと、尊敬と畏怖を込めた目で見るのが通常である。

ユークのような反応は、そのような常識を知らないがゆえの反応だった。

それを教えるか否か。少しアルフィは迷う。

「しかし便利だねえ。俺も使えるようになりたいな」

まじまじと自分のカードを見ているユークの呑気な様子に、アルフィは結局指摘するのを止めることにして、話題を変えた。

「して、ユーク」

「なに？」

「もう一度聞くんが、ユークは勇者選定の儀に行かないのか？」

尋ねると同時に、今はユークの膝の上に置かれているだろう、四角い鞆のある方向へ視線を落とす。

……なんとなく、ユークは選定の儀へ行っておいた方がいいような気が、するのだが。

「……うーん。そうだねえ」

冗談で言っているのではないと、ユークも察したのだろう。一度視線を天井に上げ、考えるように唇を尖らせた。

「昨日も言ったと思うんだけど。俺には、世界を救う責任なんて負えないよ」

「……そうか」

「それにね、アルフィ。たぶん薄々気づいてると思うんだけど、」
言葉を区切り、ユークは困ったように笑うと、声を小さくして呟くように言った。

「……………俺ね。ワケありなの」

朝食があらかた終わったので、店を出る。

朝の空気は日中と違って少し肌寒い。市場は買い物をする人々がちらほらと姿を見せていた。太陽がもう少し高くなれば、昨日のよう賑わうだろう。

人目をつかないように家の裏に入り込む。それから、先ほどの店でユークの皿からこっそりもらってきた豆のパンをジークに与えた。「……詳しく聞かないんだね」

はむはむと鞆に入ったまま、美味しそうに食すジークを見下ろして、ユークはぼんやりと呟く。

「……聞いた方が、いいんだと思うがな」

壁に背を預け、行きかう人々から一人と一匹の姿を隠すように立ち、アルフィはぼんやりと腕を組んだ。

「面倒臭いことになりそうだから聞かない」

「うわあ、冷たい率直な意見をアリガトウ」

「……私の中で、ユークは？記憶喪失？ということになっている」
アルフィはあえて視線を合わせず、壁を見つめたままそう告げる。ユークもまた、アルフィを見ることはなかった。見ずに、けれど少しだけ目を細めた。

「……そうだね。そんなもん、なのかな」

「だから何かを知らなくても、今更驚かないし、警備兵の詰所に連れて行く気もない」

「うん」

「ユークレースとは昨日たまたま意気投合し、昼ご飯を一緒に食べた。……それだけの、関係だ」

「……うん」

深入りするつもりはないと、伝わったろうか。アルフィは思う。

好奇心はある。知的探究心は、アルフィは人一倍あると自負している。特に助けるわけでもないのに知りたいと思ってしまう、野次馬精神もちろんある。

けれどそれをすべて押し込めてでも、ユークの事情を聴くのは避

けようと、そう思った。

アルフィは人間だ。聖人君子でもない、自分勝手に自己中心的だ。これ以上背負いたくない。……自分のことで、手いっぱいなのだ。

「……俺ね、この世界に愛着がないの」

独り言のように、ユークがそう呟く。

相槌を期待していないようだった。だからアルフィは何も言わない。

「守りたいものが、ないの」

ぼつりと。

何の感情も籠っていないような声が、落とされた。

「だから、こんな俺が聖剣を抜いても　　世界を、救えないよ」

「……そうか」

それが答えかと、そう解釈した。

キュイ、とジークが鳴く。ご飯のお礼を言っているようだ。

「うん、どういたしまして。また鞆に入ってきてね」

ユークはジークの頭を撫でてから、そっと鞆に押し込める。その一連の動作を、ぼんやりとアルフィは見つめている。

「終わったか」

「うん」

「なら、行くか」

そろそろ次の目的地に行くための馬車を見つけないければならない。時間を調べ、目安をつけて、簡単な買い物を済ませる。

別れの時間だ。

「ユークは、次は何処に行くのだ？」

「決めてないんだよね。アルフィはあるって言ってたっけ」

「うん。馬車を見つけないで」

まだ少ない人通りを、街の入り口に向けて歩く。乗り場は入り口
近辺にある。

広場を通り抜け、階段を下りていく。

数歩降りたところで、ふいに背後から声がかかった。

「あのさ、アルフィ」

「うん？」

「……………護衛、雇う気ない？」

いささか緊張した声に、アルフィは足を止めた。振り返ると数段
上の場所で、困ったように笑うユークが居る。

「女の子一人旅はいろいろ危ないでしょ？ 今ならお得な人材知っ
てるけど」

「……………ほう。お得、とな」

「少なくとも腕は立つよ。旅慣れてもいると思う。

ただね、ワケありっぽくて、この世界の常識とか情報とか知らない

んだ。ひとつ厄介事な相棒ももれなくついてくるし」

「とんだ不良物件だな」

「うん。だから、お値段お買い得」

階段下で、アルフィはユークに向き直って腕を組んだ。片眉を上げ、挑戦的に笑みを浮かべる。

「で、いくらだ？」

「情報と…… ご飯の美味しい店、教えてくれるなら」

「じゃあ、それにひとつ付け加えだ。

連れているドラゴン、触らせてくれ」

「……………うん、って言いたいとこだけ。本人次第かなあ、俺からも頼んでみるけど」

面倒事は抱えたくないと思っていた。
ただ、気ままに旅をしたいと思っていた。

世界を救う。 関係ない。

聖剣。 関係ない。

勇者。 関係ない。

魔法。 関係ない。

魔族。 関係ない。

気ままに旅をして。気ままに美味しいものを食べて。気ままにい
ろんなところへ行って。

そうしていつか 自分のことを？許せる？なら。
そうしていつか 自分がいることの？意味？を、見つけら
れるなら。

けれど、頷いてしまったのは何故だろう。

いろいろな理由がある気がした。知的好奇心。打算的感情。野次
馬根性。自暴自棄。同情。
表の理由も裏の理由も、説明しろと言われればいくらだって取り
繕うことができるだろう。

だから、こう思うことにした。

？食べ物に興味があったから？
きつと、一緒に旅をするなら面白いんだろうなと。そう、思っ
たから。

クアルエイドの国へ行く馬車の切符は、二枚。掌にある。
特産の葡萄が美味しいらしい。そう言ったら、楽しみだと青年は
笑った。

炭火焼ハンバーグ 6 (後書き)

読んで頂きまして、ありがとうございます。

誤字脱字など報告いただければ幸いです。

ほんの少しの間、二人と一匹の旅を見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2962z/>

竜と食べ歩き。

2011年12月11日08時45分発行